



2024年7月30日から8月2日に「第25回国際視野画像学会」が
英国・カーディフで歴史的な猛暑の中、開催されました。

講堂内でのTony Redmond会長

IPPS (Imaging and Perimetry Society) は、2年ごとに開催される国際学会で、視野と視覚に関する議論が行なわれています。参加者は主に視野の視覚研究を行なっている研究者が多く、医師の割合は少ないようと思われますが、日本からの参加者の多くは眼科医です。そのため、発表内容は視覚生理に関する専門的な内容が多く、臨床医としてはそのすべてを理解することが難しい場合もあります。一方で、検査方法や結果に対しても臨床医では思い付かないような新たな視点を得る機会になることもあります。

発表された内容は、レクチャーを含め57演題あり、日本からは10演題の発表がありました。

視野検査視標、視野検査条件、検査アルゴリズムstructure-functionの関係など、従来と同じく視野研究に関するものが多くあり、近年のト

IPPS in Cardiff



近畿大学
准教授 野本 裕貴
のもの
ひろき

緒に行動するため、海外の研究者の意見交換を行なつたり、知り合いになつたりすることができました。実際に私が英国・Moorfields Eye Hospitalへ留学するきっかけを得たのも、2010年にスペイン領カナリア諸島で開催されたIPPSでした。

2024年は7月30日から8月2日の4日間、Cardiff Universityの

Tony Redmond先生がホストとなり、英国のカーディフで開催されました。カーディフはロンドンから鉄道で西へ約2時間の場所に位置するウェールズの首都です。会場はその中心部にあるCardiff UniversityのSir Stanley

Thomas OBE Lecture Theatreでした。なお、この建物の名称は建設費の一部を寄付した実業家から付けられているようです。

今回のIPPSには、埼玉医科大学、東京慈恵会医科大学、北里大学、総合病院聖隸浜松病院、名古屋大学、岐阜大学、金沢大学、近畿大学、鹿児島大学(順不同)に所属する多くの日本の先生方が参加されました。

講演の発表内容

発表された内容は、レクチャーを含め57演題あり、日本からは10演題の発表がありました。

視野検査視標、視野検査条件、検査アルゴリズムstructure-functionの関係など、従来と同じく視野研究に関するものが多くあり、近年のト

ンドにあるタブレット端末＆Virtual Reality(VR)ゴーグルを使用した新しい視野検査機器、AIを用いた新しい解析方法などもありました。そして、その中には臨床医として、現場で今後のスタンダードとなり得るか否かを見届けたいと思わせるもの多くありました。



松本長太先生によるIPS Lecture



学会会場



ウエルカムパーティーにて
左より私、David Garway-Heath先生、Roger Anderson先生、
松本長太先生、Giovanni Montesano先生、朝岡亮先生、平澤一法先生



Cardiff Castle内のディナー

Keynote Lectureは、開催校であるCardiff University 62人の先生による講演があり、Derek Jones先生による脳組織のイメージングと機能医として緑内障進行評価に関する過去から現在までの知見を紹介し、その後どのように診療を行なうかについての内容でした。

先生による“Counterintuitive issues in Glaucoma Progression”は、臨床医として緑内障進行評価に関する過去から現在までの知見を紹介し、その後どのように診療を行なうかについての内容でした。

先生による“Neuroimaging”は、James E Morgan先生からRGCを早期に発見し、その修復に関する研究を

内容とした“The Degenerating Retinal Ganglion Cell-Opportunities for Detection and Repair”でした。それらすべてのレクチャーは、過去から現在に至るまでの研究の経緯、

そして、現在も進行している最先端の研究内容の知見を得られる素晴らしいものでした。

過去のIPS参加記事を読まれた方のある方は、存じかもしませんが、IPSは学会前日のウエルカムパーティーから始まり、初日夜のディナー、2日目の観光ツア、最終日夜のクロージングバンケットなどのソーシャルイベントがあります。

今回は学会場の近くにあるRoyal Welsh College of Music & Drama 内のホールにてウエルカムパーティー、初日夜はCardiff Castleにあるレストランでのディナー、2日目はCardiff Castle医学とポートでの川下り、Cardiff Bayの散策が行なわれました。この日、カーディフは歴史的な猛暑となり、夕方になつても暑く、参加者は汗だくになりながら日陰を探しつつ観光を行ないました。

観光と懇親会

そして、観光以上に印象的だったのは、ウェールズの人々があくまで“Welsh”として誇りを持っており、近年は英語とは異なる独自の言語（例えば「good morning」はWelshでは「bore da」）を大切にし、次世代にも伝えようとしていることでした。

最終日の夜にあるクロージングバケツでは、各国の参加者が出し物を披露してパーティーを盛り上げます。出し物では主に母国語で各国の歌を歌うのですが、参加者が少ない国の場合では1人で歌つた後に多くの拍手が起ります。英語に苦手



カーディフ観光ツアー Tony Redmond学会長夫妻を囲んで



日本チームによるクイズ「IPS Olympic」



Cardiff Castleでの集合写真

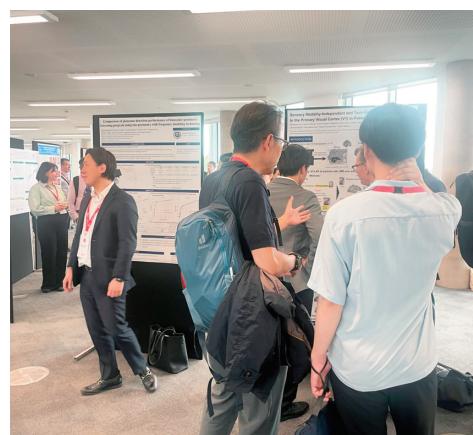
意識を持っているせいか学会ではやや存在感の薄い日本人参加者ですが、毎回この時が最大の見せ場となります。今回も松本先生の司会のもと、「上を向いて歩こう—Sukiyaki Song」をわが国の参加者全員で歌つた後、学会長のTony Redmond先生、Vice PresidentのAllison M Mc Kendrick先生の2人に、「IPS Olympic」と題したクイズを行ないました。各社視野計のボタン音や刺激視標呈示時の音を聞いてもらい、視野計のメーカーや機種を答える形式で会場を盛り上げました。なお、勝者はAllison先生で、松本先生からわれわれが手作りした「IPSゴールドメダル」が授与されました。

そして、この場でも国内外の参加者と研究内容やそれ以外の話をすることで、より親睦を深めることができます。このようにIPSは研究と懇親の両方において、魅力のある学会となっています。

2028年には2018年に金沢で開催されて以来10年ぶりに日本で開催予定となつております。国際学会からのスタートは難しいと思われる方は、まず2025年5月31日から6月1日に埼玉県で開催されるJIPSに参加いただけたらと思います。

最後に、学会期間中の写真を提供いただいた北里大学の平澤一法先生、近畿大学の杉野日彦先生に厚く御礼申し上げます。

IPS、JIPS(日本視野画像学会)へのお誘い



熱い議論が交わされたポスターセッション